

第30回日本医用エアロゾル研究会記録

会 期：2006年9月1日（金）

会 場：城山観光ホテル

会 長：黒野 祐一

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科聴覚頭頸部疾患学

基調講演

「耳鼻咽喉科とエアロゾル療法 —日本医用エアロゾル研究会30年の歩み—」

間島雄一（三重大学医学系研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科）

日本医用エアロゾル研究会は発足して30年になります。この間に我々をとりまく医療環境も大きく変化してきました。とはいえ、上気道疾患を大きな守備範囲とする耳鼻咽喉科医にとってエアロゾル療法の占める重要性がいささかも減じているとは思われません。経験上エアロゾル療法が有用であるとしても、科学的根拠に基づいたエアロゾル療法の理論武装が必要であることは、近年の診療報酬改定時にしばしば痛感されるところです。過去30年に日本医用エアロゾル研究会で発表されたエアロゾル療法の基礎的、臨床的研究はこの理論武装に大いに役に立つものでありますが、残念ながら、これらの研究が広く知られているとはいえないのが実情であろうかと思えます。

そこで本基調講演では、日本医用エアロゾル研究会で発表された研究を review し、エアロゾル療法の理論武装に有用な研究や適切なエアロゾル療法を施行するための情報をお示ししたいと思います。そして本講演が、エアロゾル療法の新たな課題への挑戦の端緒となることを期待しています。

シンポジウム

司会の言葉

石塚洋一（帝京大学溝口病院耳鼻咽喉科）

大越俊夫（東邦大学耳鼻咽喉科学第2講座）

日本医用エアロゾル研究会が今年で30回を迎えるにあたり、黒野祐一会長（鹿児島大）より、30周年にふさわしい、すばらしいタイトル「エアロゾルの夢（未来）を語る」をいただきまして、司会者としても大変楽しみにしております。

エアロゾル療法の代表格でもあるネブライザー療法は、わが国では1958年（昭和33年）に保険診療で認められて以来、半世紀もの長い間、日常臨床に汎用され、現在では局所療法の一つとしてすっかり

定着した、確立された治療法になっております。

本研究会のシンポジウムでは、過去にネブライザー療法の有効性の問題、使用する薬剤や使用機器の問題、副作用やエアロゾルの沈着の問題などが取り上げられ、耳鼻咽喉科医が行う、専門性のある局所療法としての裏付けがされてきました。そして、一昨年（間島雄一会長）と昨年（友田幸一会長）のシンポジウムでは、2年続けてネブライザー療法をより安全に、効果的に行うための、ネブライザー機器の保守・点検・消毒といったテーマが取り上げられ、具体的な解決策が討議され、その方向性が示されました。その結果、より安全性の高い局所療法が確立できたと考えております。

ネブライザー療法は、1948年（昭和23年）、アメリカの内科医であるバラック博士が、ペニシリンをエアロゾルにして用い、その当時は「魔法の霧」と、大きな反響を呼んだわけですが、あれから60年近く経つこととなります。本研究会が30周年を迎えるにあたり、もう一度その原点に立ち返り、このエアロゾルをこれからどのように使っていったらいいかという、未来の夢を語ってもらうのが、今回のシンポジウムの主旨であります。

本シンポジウムでは、その方面の研究に長年取り組んでいる、5人の先生方に演者をお願い致しました。松根彰志先生（鹿児島大）には代替医療としてのエアロゾル療法、荻野 敏先生（大阪大）には鼻アレルギーのエアロゾル療法、内藤健晴先生（藤田保健衛生大）には咽喉頭のエアロゾル療法、大野伸晃先生（名古屋市立大）には鼻ネブライザー療法の展望についてお話しいただき、最後に黒野祐一会長（鹿児島大）に経鼻ワクチンのお話しをしていただく予定にしております。

「代替医療としてのエアロゾル療法」

松根彰志（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科聴覚頭頸部疾患学）

本号原著掲載

「鼻アレルギーのエアロゾル療法 —ミストサウナの効果—」

荻野 敏（大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻）

【目的】43℃のエアロゾル、すなわち鼻局所温熱療法が鼻アレルギーの諸症状に有効であることについてはすでに多くの報告がある。今回家庭の浴室で40℃のミストを発生するいわゆるミストサウナの鼻アレルギーの鼻閉に対する効果を検討した。

【対象および方法】10名の鼻アレルギー患者を対象に、ミストサウナ入浴（10分）と通常の40℃入浴の鼻閉に与える効果をVASおよびacoustic rhinometry（AR）により比較した。なお全例別の日時に両方の入浴および測定を行っている。

【成績および考察】通常入浴では、出湯直後のみVASで鼻閉の改善がみられたが、ARによる鼻腔容積の有意な増加はみられなかった。それに対し、ミストサウナではVASにおいてもARにおいても鼻閉の改善は30分以上持続し、90分後においてもミストサウナは通常入浴に対して有意に鼻閉改善効果がみられた。このようにミストサウナは従来の鼻局所温熱療法と同様の効果がみられ、これを用いた毎日の入浴は鼻アレルギーの有用な治療法の一つになると思われた。

「咽喉頭のエアロゾル療法 —オーダーメイド療法—」

内藤健晴（藤田保健衛生大学耳鼻咽喉科）

本号原著掲載

「鼻ネブライザー療法の展望 —抗菌薬の開発—」

大野伸晃，村上信五（名古屋市立大学耳鼻咽喉科）

本号原著掲載

一般演題

1. 口呼吸におけるヒト喉頭部位での粒子沈着特性

高野 頌，西田尚弘，伊藤正行（同志社大学工学部）

兵 昇（京都市）

間島雄一（三重大）

本号原著掲載

2. 芳香剤添加ネブライザー実施上の工夫 —その2—

平石光俊，石塚洋一（帝京大学溝口病院耳鼻咽喉科）

三須玲子（とよす耳鼻咽喉科）

石橋 悟，日原房雄（第一医科株式会社）

香りをを用いて病気の治療をすることを目的としたアロマセラピーという分野が，臨床医学でも応用されはじめている。私共も，数年前からアロマセラピーを導入し，ネブライザーへの芳香剤添加，癌患者へのアロママッサージ，疼痛・不眠・精神的不安といった症状緩和に，その有用性を確認している。ネブライザー療法では，ハッカオイルやオレンジエッセンスなどの添加溶液を用いることで，局所療法としての不快感を軽減し，より満足度の高い治療法として支持されてきている。昨年の本研究会で，ネブライザー機器のエア噴出部に，芳香剤を含んだアロマビーズを入れたアクリル管円形ケースを接続し，この中をエアが通り抜けることで，ネブライザー溶液と一緒に混合し，エアロゾル噴出部に香りが付く新しい工夫を報告した。今回は，実際の臨床にこの新しい工夫を応用し，その有用性について検討したので報告する。さらに，ネブライザー機器使用時に，室内にも香りを付けることを試みたので，併せて報告する。

3. CMX ネブライザー療法の副鼻腔炎術後感染予防に関する検討

—Preliminary study から—

浜崎理佐（みたき総合病院耳鼻咽喉科）

鈴木賢二，藤澤利行，中島真幸（藤田保健衛生大学医学部第2教育病院耳鼻咽喉科）

本号原著掲載

4. スギ花粉症に対する初期療法としての塩酸レボカバステチン点鼻液の有用性

宮之原郁代，松根彰志，相良ゆかり，西元謙吾，黒野祐一

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科聴覚頭頸部疾患学)

(はじめに) これまでスギ花粉症に対する初期療法は，内服薬で行われることが多く点鼻薬による検討はほとんどみられない。今回我々は，第2世代抗ヒスタミン薬である塩酸レボカバステチンの点鼻液を用いて，スギ花粉症に対する初期療法の検討を行ったので報告する。

(対象・方法) 対象はスギ花粉症患者16名で，スギ花粉の飛散開始日の2週間前から塩酸レボカバステチン点鼻液が投与されたものを初期治療群(10名)，花粉飛散開始日以降に受診したものを飛散後治療群(6名)とした。飛散開始日を起点として，2週ごとに両群の症状の推移，メディケーションスコアを比較検討した。

(結果) 鼻汁，total symptom scoreにおいて2週目まで，有意に初期治療群で症状スコアが低かった。メディケーションスコアは，シーズンを通して有意に初期治療群でスコアが低かった。

(まとめ) 塩酸レボカバステチン点鼻液の初期療法としての有用性が示唆された。

5. 嗅覚障害に対するステロイド薬の長期点鼻療法の安全性と有用性

小林正佳，今西義宜，石川雅子，西田幸平，足立光朗，大石真綾，中村 哲

坂井田 寛，間島雄一(三重大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉・頭頸部外科)

嗅覚障害の治療としてステロイド薬の点鼻療法が普及しているが，治療が長期にわたる症例も多く，その副作用が懸念される。今回0.1%リン酸ベタメタゾンナトリウム液の点鼻療法を施行した62例について副作用の有無を検討した。その結果68%例に点鼻開始後1~2ヵ月で血清ACTHまたはコルチゾール値の低下を認めた。点鼻療法を中止した8例は全例1ヵ月後にそれらの値が正常範囲内に回復した。同療法を継続した34例中4例で開始後2~5ヵ月で自覚的な顔面腫脹感，顔面の濃毛化が出現したが，中止後1ヵ月ですべての症状が消失した。同療法のみを3ヵ月以上継続した例の78%で何らかの嗅覚障害改善が得られた。以上からステロイド薬点鼻療法の長期連用は軽度で可逆的な副作用を生じ得るが，嗅覚障害の治療効果は高い。よって同療法は有用な嗅覚障害の治療法であり，臨床的必要性に応じて十分な注意の下に長期連用することは可能と考えられる。

6. 小児気管支喘息患者の外来吸入療法指導に対する試みと有用性の検討

大川智子(東京臨海病院薬剤部，共立薬科大学臨床薬学講座)

白川清吾(東京臨海病院小児科)

矢崎知子，吉山友二，菅家甫子(共立薬科大学臨床薬学講座)

本号原著掲載